

『片品川に浴うて』

内田 順子

片品川は、群馬・栃木・福島の三県境の黒岩山に源を発し、沼田で利根川に合流する。片品川本流沿いの会津沼田街道は、沼田から尾瀬を経て会津に通ずる。宮本馨太郎は、一九三〇（昭和五）年、一九歳のときに、民俗服飾の研究者である父、宮本勢助の採訪調査に同行して本作品『片品川に浴うて』を撮影した。群馬県北東部に位置する片品川沿いに、勢助の調査の様子や、人びとの暮らしなどを記録している。同じ年の五月、馨太郎が勢助の調査に同行して撮影・制作した『奥利根の流れ』同様、馨太郎による字幕が入った作品である。

特徴

勢助の民俗服飾研究の採訪調査に同行しての撮影であるため、『奥利根の流れ』同様、衣服、履物、身につける道具類がおもな撮影対象であり、この調査時の成果は、勢助の『民間服飾誌 履物篇』（雄山閣、一九三三）および『山袴の話』（大日本聯合青年団編、一九三七）に活かされている（以下それぞれ『履物編』『山袴の話』とする）。また、本映画の撮影後、馨太郎は調査時の聞き書を、映画と同じ「片品川に浴うて」という題名で『泥足の跡』（立教大学十四番教室、一九三〇年十一月一日発行）に寄せている（以下「聞き書」とする）。これらの活字資料は本作品を見るときへの助けとなる。また、五月五日の奥利根調査のあとの七日、勢助は片品川の老神^{おいがみ}で山袴（フンゴミ）二点を購入しており¹、片品川流域の調査が、奥利根調査時より企図されていたことがうかがえる。風の強い上州によく見られた石を乗せた板噴屋根、寄棟や入母屋作りの萱葺屋根、二階部分の採光や換気を良くするために屋根の平側を切り落とした民家（大楊^{おおよう}）、曲り屋の構造の民家（戸倉）など、さまざまな形式の屋根が映り込んでいるのもこの作品の魅力のひとつである。

構成

馨太郎自身によるタイトル・字幕と、現地で撮影された映像が組み合わされた作品である。

冒頭は、「美やもとグラフ」という画面に続き、映画のメインタイトルと撮影年月日(①)。次に、片品川の流れ、それに沿って歩く勢助の姿があり、「秋と云つても、未だ暑い九月、私達は片品川に浴うて、民間服飾研究の資料を尋ねて歩きました」と字幕が続く。そして、

老神から順に、大楊、追貝、観光名所の鱒飛滝・吹割の滝・浮島、浮川、下平、須賀川、鎌田、越本、土出、戸倉に至るまで、片品川沿いをのぼってゆく。それぞれの集落の名称は、『奥利根の流れ』同様、漢字と読み仮名の併記で示される。映画の終わりには「美やもとグラフ㊦」というロゴ画面が表示される。

内容

〈老神〉 旅の起点の老神は「群馬県利根郡東村」に属している。字幕「沼田から五里。赤城山の神が傷を直ほした…と云う温泉場」に続き、温泉旅館の様子や河原の露天温泉に行くために急な坂道を降りる勢助の姿が見える。老神本村の農村風景を過ぎ、対岸の集落「大楊」に向かうために勢助は片品川を渡る。映画には登場しないが、この時の老神での調査の際、勢助は「藁製短靴型履物」をこの村でユキグツと呼んでいることに注目している（『履物篇』一三二頁）。

〈大楊〉 勢助が集落の女性に山袴の身につけ方を実際に見せてもらう場面が撮影されている（②）。また「フンゴミバカマ-フンゴミ」という字幕が入る。フンゴミは腰まわりがゆったりできている。背中を保護する「ジユウロウタ」を着けて歩く男性のうしろ姿も記録されている。

〈追貝〉 鉄橋を渡って追貝に入ると大嶋屋という旅館が見える。「聞き書」によれば、追貝には東村の役場と小学校があり、沼田からここまでは車で来ることもできたという（「聞き書」一一頁）。洗濯を干す女性、薪炭材と見られる木材を運ぶ馬などに続き、「此處では山袴の事を、モクシャク、或はマツタバカマと云つて居た」と字幕が入る。これは昼食をとったソバ屋のおかみさんからの聞き取りであった（「聞き書」一二頁）。このシーケンスでは、「ウソグツ」というワラジの上に履くワラ製の履物を調査している（③）。勢助はウソグツについて「藁製。草鞋に掛ける爪掛型の左右に紐縄の有る履物である。福島県相馬地方のジンベ・会津のツマガケと同物であると云ふ」と述べている（『履物篇』一四三頁）。

「飛鱒滝が見える」という字幕からしばらく、観光旅行の記録のようなシーケンスが続く。この滝のすぐ上流にある「吹割の滝」を「片品川の絶景」という字幕で紹介している。撮影は九月始めの残暑の中で、河原近くで水浴びをして遊ぶ子どもたちの姿も見える。吹割の滝の一五〇メートルほど上流にある「浮島」の周辺にはたくさんの丸太があり、上流で伐採した木材を流送するためのものと見られる。片品村は江戸時代から幕府のご用材

を命じられるなど、林業の盛んな地域である。

〈浮川〉 山袴の聞き取り調査をする勢助や蓑を着けて歩くかご売りと見られる男性の姿が記録されている。「立澤ばしを渡ると、いよいよ片品村であります」と字幕が入る。

〈下平〉 ここから「利根郡片品村」となる。男も女も盛んにハカマを穿いており、裁縫のしかたが奥利根のものと同じだという（「聞き書」一二頁）。字幕「此處では、山袴の事をコンバカマと呼んで居ります」は、男の子からの聞き取りであり、ここで初めて耳にしたものだという（「聞き書」一二頁）（④）。

〈須賀川〉 交通の難所であった大崖を通る一九二〇（大正九）年に開通した道路が見える。須賀川でも山袴が盛んに用いられており、とくに男性が多数穿いていたという（「聞き書」一二頁）。

〈鎌田〉 村の景観に続き、「小学生のハカマ」「娘達のフンゴミ」として、小学生たちのハカマ（⑤）や娘たちのフンゴミ（⑥）が撮影されている。「夏は、ハカマで、冬は、フンゴミ」という字幕は、鎌田では、ハカマは乗馬ズボンのようで仕事がしやすいので夏に穿き、フンゴミは冬に穿くものでダブダブしていると聞いたことによるもので、追貝から鎌田までの約二里の間、まったくフンゴミを見なかった理由がわかったと述べている（「聞き書」一二-一三頁）。

〈越本〉 景色はしだいに山深くなっていく。山袴を着けた男性と荷を積んだ馬の姿が見える（⑦）。字幕「此處では、ハカマと云う」は、越本では三月から一〇月まではハカマを穿き、一一月から二月頃まではフンゴミを穿くと聞いたことに基づいており、これまでの道程では、越本がもっとも盛んに山袴を使用していたとも述べている（「聞き書」一三頁）。

このシーケンスでは、「丁度、旧七月十六日だったので、お精霊を送るのに会いました」と字幕があり、火のついた線香と、ホウの木と見られる木を持って送り火に向かう女性の姿をとらえているほか、男性から「砥石を入れる袋をトヅカリと云う」ことを調査した（⑧）。越本にはオホダ（太田）・サイクヤ・アムラ・ウワデ・ナカザトという五つの小字があり、砥石を入れる袋については、サイクヤで草を刈っていた若い男性に、使っていた砥石の事を尋ねたところ、砥石を鎌砥（カマド）といい、砥石を入れる袋をトヅカリと言うと教えられたとある（「聞き書」一三頁）。さらに上流に向かうと、尾瀬沼から帰ってきた娘たちとすれ違い、「尾瀬沼へ行つて来た」と云う村の娘達も皆なハカマを、はいて居りました」と観察している。

〈土出〉 大勢の子どもたちに囲まれている勢助の姿が見える。ここでは「小学生は全部ハカマを穿いて居た」という（「聞き書」一三頁）。橋をわたり、勢助が土出を振り返っているショットがある。道はさらに山深くなり、「追貝へ五里。尾瀬沼へ五里」というところまで至る。

〈戸倉〉 この映画の最終地点である。戸倉は、民家の大部分が曲り屋の構造で作られていた²。画面手前に炭俵が積まれている民家は、おそらく曲り屋であろう。戸倉は片品川の流れから三百尺（約九メートル）以上も高いところにあり、道に沿って少しばかりある畑には、アワが一面に実っていたという。人家は二五戸。尋常科の分教場では先生ひとりで生徒三〇人を教えているという（「聞き書」一四頁）。

戸倉の小学生の話では、戸倉では冬もハカマを穿き、フンゴミは履く人もいるが稀だという。また、戸倉の旅籠屋の主婦によると、夏、薄い着物のときはハカマを穿き、冬、綿の長着のときはフンゴミを履く、などの聞き取りをしている（「聞き書」一四頁）。

[謝辞] 本解説執筆にあたり、大竹将彦氏にご協力賜りました。心から御礼申し上げます。

写真キャプション

- ①メインタイトル画面。昭和五年九月六日から九日までの三泊四日の調査であったことがわかる。
- ②山袴の着け方を撮影。『奥利根の流れ』では着け方は撮影されていないので、こうしたショットが必要だと考えて撮影されたものかもしれない。
- ③ウソグツ。ワラジにかけて用いるもの。追貝で調査したウソグツの詳しい挿絵が『履物篇』一四三頁に示されている。
- ④ハカマを着けた少年。山袴をこの地域で「コンバカマ」と呼ぶと教えたのはこの少年であろうか。
- ⑤ハカマを着けた小学生の少女。ハカマを着けていない少女たちもいる。
- ⑥フンゴミを着けた少女たち。
- ⑦山袴を着けた男性は「乾物商」と入った袴纏を着ている。
- ⑧砥石と砥石を入れる袋を調査する勢助。この男性から、砥石を「鎌砥（カマド）」と呼び、砥石を入れる袋をトヅカリと呼ぶことを調査したと思われる。

-
- 1 木綿・縞の二点のフンゴミ（群馬県利根郡東村老神、昭和五年五月七日採集、(財)宮本馨太郎記念財団編『(財)宮本馨太郎記念財団収蔵民俗資料及び下町の民俗調査報告書』一九八一、一五頁）。
 - 2 都丸十九一『消え残る山村の風俗と暮らし―群馬の山村民俗』高城書店出版部、一九五九、三三頁。